

## 丸山眞男文庫所蔵の福沢諭吉に関する草稿・ 速記稿類の概況

松沢 弘陽・山辺 春彦

丸山眞男文庫には、福沢諭吉に関する大量の草稿・速記原稿類が保存されている（資料番号二九四―二九六、三〇〇―三〇三、三四三、四〇五、四三〇―四三二、六六五、九〇八）。それには、A. 一九四七年度講義ノートの一部と思われるもの（資料番号三四三―一八、四〇五―五、四〇五―八）、B. 講演記録、C. 断片的草稿が含まれている。

A. 整理の上『報告』本号に掲載。

B. 丸山が行った特に敗戦後初期の福沢に関する講演については、  
公刊された諸団体の歴史類の中に記述がある。

1. 一九四八年一月一〇日、交詢社福沢文庫開設式における講演（富田正文監修『交詢社百年史』交詢社、一九八三年、三八九頁、竹田行之執筆『交詢社の百二十五年―知識交換世務諮詢の系譜』交詢社、二〇〇七年、九二頁）。慶応義塾の福沢先生研究会機関誌『福沢研究』復刊一号にはこの講演について「福沢先生のご思想に就いて 東大教授

丸山眞男 交詢社福沢文庫開設記念会講演」などがある。ただ、日付については昭和二十二年と誤っており、この誤まりが丸山自身の記録にも踏襲されることになる。

2. 一九四九年六月二二日（か）。福沢先生研究会主催の石河賞受賞記念講演。福沢先生研究会の正史といえる、慶応義塾大学福沢先生研究会編『去来有真 慶応義塾福研・有真寮史』（慶応義塾大学福沢先生研究会Ⅱ会長西川俊作刊、二〇〇四年）に、石河賞の創設、丸山への授賞、丸山の受賞記念講演およびその後について詳しい記述がある。以下主としてこれにより、必要に応じて福沢先生研究会の当時の定期刊行物を参照して説明する。石河賞は、福沢先生研究会が、研究会発足三〇周年を記念して、福沢研究に大きな成果を残した石河幹明を顕彰して創設したもの。戦後に発表された福沢研究を対象とし、選考には、板倉卓造、高橋誠一郎、潮田江次、小泉信三が当たった。選考対象、

単行本一五冊、論文一九篇から、選考委員全員の一致で、一九四八年二月三日「福沢に於ける「実学」の転回」と「福沢諭吉の哲学」の二編の業績により、丸山が選ばれた。これをうけて、翌四九年慶応義塾三田キャンパスで丸山の受賞記念の講演が行なわれた。『去来有真』は、福沢先生研究会の『福沢研究』四号（一九五〇年一月）の記事にもとづいて六月二日開催とするが、同じ福沢先生研究会の『福研ニュース』第四号（日付なし）には、「福研初夏のプレゼント」講演会シリーズ」として第一回、一九四九年五月四日、金沢冬三郎、第二回五月一日、場所未定、嘉治隆一、に続いて第三回、六月一〇日、場所未定、丸山眞男「近代思想家としての福沢諭吉」（仮題）とあり、丸山の講演が「石河賞第一回受賞者」としての「同賞記念講演会である」旨記されている。第四号が五月一日以前の発行であることがうかがわれる。『福研ニュース』第五号（一九四九年六月二八日）は、「丸山氏（石河賞受賞）記念講演によせて」というタイトルの、丸山の福沢研究についての深い理解にもとづく長文の紹介を載せている。なお同じ面にこの回の五月はじめからの行事の記録があるが、六月一七日までである。また前記の「記念講演によせて」は「こ、に氏の記念公演が行はれるに当り」としており、講演がまだ行われていないことをうかがわせる。これらから講演は六月下旬のかなり遅くか、それ以降である可能性も考えられる。また『去来有真』一〇六頁掲載の七月二日のOB会の記事によれば、この会合で丸山の石河賞記念講演とその後の座談会の様子が紹介されたとあり、記念講演はおそらくとも七月一

日までには行われたことが明らかである。『去来有真』の年表、一九四九年の欄には「6・22丸山眞男氏講演（未確認）」とあり、前記のような事情を反映するのかもしれない。なお丸山は、当時の福沢先生研究会会長であった富田正文を追悼する「憶い出のくさぐさ」（『丸山眞男集』第一五巻二四六頁）で、交詢社での講演の話に続いて「私は三田の方での話はかすかに記憶しているが」とのべる。なお『去来有真』は、『福沢研究』八号（昭和三三年八月）の「座談会 福沢から何を学ぶか―丸山眞男氏を囲んで― 富田正文・昆野和七・土橋俊一列席」によって、この講演の八年後にも福沢先生研究会が主催した、丸山を囲む座談会の様子を詳しく伝えている（一一三、一一五―一二二頁）。

3. 一九五〇年四月八日、「福沢諭吉五十回忌記念学術講演会 大阪慶応倶楽部主催、於大阪毎日新聞講堂」人及び思想家としての福沢先生」、慶応義塾大学名誉教授高橋誠一郎：「福沢先生の思想について―特に時事新報を中心に―東京大学助教授丸山眞男、「福沢先生と戦争及び革命」同志社大学教授田畑忍」とある（『慶応義塾百年史』下、慶応義塾、一九六八年、二〇頁以下）。慶応倶楽部は慶應義塾同窓生組織の一つ。

なお慶応義塾百年史編纂に当って河北展生を始めとする担当委員が収集した資料の中の、「昭和二十五年度儀式書類綴」の中に、昆野和七の署名捺印のある、昭和二十五年四月十二日付の「福沢先生偉業展出張報告」があり、昆野が四月七日に丸山に同行して大阪に着いてから、八日夜帰京する丸山を見送るまで、講演とその前後の各方面からのい

たれり尽せりの待遇までにわたって記録している。

「四月八日 講演会開催（午後一時―午後四時半）」

講演会 演題及講師左の通り

福沢先生と戦争及び革命 同志大教授 田畑 忍氏

近代的ナシヨナリストとしての福沢先生

東大助教授 丸山眞男氏

人及び思想家としての福沢先生 「国立」博物館長

高橋誠一郎氏

中略

丸山氏は先生の国権皇張論を他の絶対主義者の所論と区別すべき点を挙げ、曾つて小泉信三氏の論じた合理主義（ラシヨナリズム）非合理主義（イルラシヨナリズム）の説を具体的に詳論したもので、特に記すべきことは、此の講演で丸山氏は未発表の研究発表をしたことです、

中略

聴衆―参集者実数は三五〇名、座席は無くなり三、四〇名は立って聞いていました、途中帰ったもの僅か十名、主催者側は予想外の盛況として驚嘆していました」

これによれば、丸山講演のタイトルも、三人の講演の順序も『百年史』記述とは大きく異なる。丸山の講演のタイトルは別掲の講演速記稿のそれと一致し、具体的内容も、『百年史』に記されるタイトルが示すところとは全く異なる。講演の順序も、丸山講演の中で、先に語った田

畑忍の講演の中の、福沢は加藤弘之と同じく「ブルジョア的国家主義者」だったとすることばに論及していることから、昆野報告が正しいことが明らかである。

なお『百年史』二二二頁以下には、慶応義塾大学の『史学』二四卷二・三合併号が「福沢論吉五十年忌記念特集号」にあてられ、田畑忍の「福沢先生の革命及び戦争観」が載せられている（一〇六一―一九頁）。この論文は、タイトルにはそのように明示されてはいないが、おそらく田畑の大阪講演にもとづくものであろう。この中でも田畑は、福沢を加藤弘之と同じ「ブルジョア的国家主義者」だったとするが、この表現は、丸山が自分の講演「近代的ナシヨナリストとしての福沢先生」の中でとりあげたところだった。丸山の大阪講演も、この「特集号」に載せることが求められていながら、何らかの事情で、別掲の丸山講演の解説でふれるように、丸山は講演速記稿に手を入れることもせぬままに終わったのかもしれない。

4. 『丸山眞男集』別巻「年譜」の一九六八年七月の項に、「慶応義塾大学で行われた「近代日本の人物像」をテーマとする小泉信三記念講座の第八回で「福沢論吉」と題して講演」とある。

これらのうち丸山文庫に草稿、速記稿などが保存されている状況は以下の通りである。

1. 竹田行之氏が『交詢社の百二十五年』を執筆される折、交詢社にこの講演の記録が残されていないかを探されたが見付からなかった

という(竹田氏、二〇二三年二月談話)。丸山文庫に保存される草稿断片の一つ(資料番号四〇五―八―四)、「結語」という表題で始まる原稿九枚(丸山夫人による福沢の「社会の形勢学者の方向」の抄録一枚を含む)は、この講演の結びだと思われる。この草稿には冒頭にエンピツで「昭22、講演、(興業クラブ?)」と書いて抹消してあり八枚目には一九七一年の講義「福沢論吉の人と思想」(『丸山眞男集』第一五卷、三二〇―二二頁)に、この断片を引用する折に記されたと思われる「昭22、興業クラブ講演」という欄外の記入がある。この講演の冒頭に

「私はふだん、資料というふうなものを、こういうふうバラバラにして、関連する資料をクリップに綴とじてしまつてあるのです。急にこういう話になりましたので、しょうがないものですから、それを慌てて持ち出しまして、適当な順序に並べてみたのですけれども、果してうまくつながるかどうかわかりません。」

とのべた上、終りではそれを受けて、

「この私の原稿の断片のいちばん最後に、こういう古い紙が出てきました。終戦直後の、昭和二十二年に、私が福沢についてしゃべった時の原稿は、こういうザラ紙なのです。……これをちよつと読んでみます。最後の結語のところだけです。」

として、読み上げた部分引かれている。これは、資料番号四〇五―八―四の断片九枚中の最後の二枚にわずかな加筆をしたものである。しかし「昭22」というのは、交詢社の講演を行った、戦後初期激動の

日々で、目まぐるしい活動の中で日時の記憶が定かではなくなっていた丸山が、『福沢研究』第四号Ⅱ復刊第一号の記事に引っぱられて、昭和二三(一九四八)年の講演を昭和二二(一九四七)年のことと思ひこんだのではないか。「興業クラブ」は、工業倶楽部以外に考え難い。丸山は交詢社での講演を工業倶楽部でと思ひちがひしたのか。これも竹田氏の教示によれば敗戦後の当時も、交詢社の集會が外部で行われたことはないという。私たちは、この断片は、交詢社で行われた丸山にとつて初めての福沢講演の、いわば幻の記録の「結び」ではないかと推定する。「福沢論吉の人と思想」(『丸山眞男集』第一五卷)三二〇頁に、「私の原稿の断片のいちばん最後の」「古い紙」、「最後の結語のところだけ」(傍点引用者)というの、この断片の冒頭の「結語」ということばに対応していると思われる。結語にいたる前の部分の草稿については、用いられた原稿用紙、インキ・ペン・字体と文章から調べを重ねているがまだ特定出来ていない。

2. 丸山文庫所蔵の草稿類の中で、この講演の草稿と考えられるものは、未だ特定出来ていない。また慶応義塾大学にも残されていないようである。

3. 丸山文庫所蔵資料番号四〇五―七がこの講演の速記である。表題は先に紹介した昆野和七の報告に記されるとおり「近代的ナシヨナリストとしての福沢先生」。「毎日新聞社」とある野紙に一行おきに記して正味六七枚。ただし、八か所には丸山が講演で引用した福沢の文章の主題を記して、引用文に見あつた長さの空白が残されている。講

演の記録としての質はあまり良くなく、聞き違いや文意の取り違いが少なくない。おそらく丸山はこれに手を入れることはしなかったものと思われる。既にのべたように、丸山はこの講演にもとづく論文を、田畑忍と同じように慶応義塾大学文学部の紀要『史学』に載せることを求められたのかも知れないが、それに応じる時間の余裕がなかったのかもしれない。この講演の後、まもなく朝鮮動乱が勃発し、平和問題談話会会員としての丸山の活動も急速に重さを増すにいたった。

そのようにこの速記稿はあまり質が良くなく、丸山の手も加わっていないが、丸山が交詢社や慶応義塾の学内から外に踏み出した最初の講演として重要な意味をもつにもかかわらず、今日までのところ、慶応義塾にも大阪慶応倶楽部にも速記稿は見見されていないので、『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』今号に、項を改めて全文を紹介する。

4. 丸山文庫所蔵の資料番号九〇八がこの講演の速記稿である。袋に「福沢諭吉―人と思想― 慶応義塾連続講義、於三田、(昭和四三、九、)」と記されているが、丸山の字ではない。また、竹田行之氏によれば当時福沢諭吉協会の常務理事でこの講演にかかわった土橋俊一の手でもない。中に収められた速記稿は、表紙に「小泉講座 丸山眞男先生 43年7月14日(土)」と書いて最後の日付は抹消されている。まじがった日付を記したものを丸山に届ける折に訂正したものではないか。中に入られているのは速記稿のコピーである。後述する『丸山眞男手帖』第五七号の本講演復刻に付された竹田行之氏の解説の中で、

「いつか公表の日を俟ちたいという」土橋俊一の配慮で速記録が「複写をふくめて二通つくられ、一通が富田さんから竹田に渡された」とある「複写」の一通がこれに当るのだろう。コクヨ二〇〇字原稿用紙一二〇枚。速記には誤まりがあるが丸山が校訂したあとは見られない。丸山文庫に保存される土橋俊一から丸山への手紙の中には、この講演に関するものが含まれており、一九六八年九月三日付には、九月一四日三田本塾西校舎五一七番教室で、加藤元一教授の北里柴三郎についての講演に続いて、丸山が福沢諭吉について講演する旨のチラシを同封した上で、日吉キャンパスが学生によって封鎖されているので会場を三田に移したこと、講演速記を『三田評論』一一月号に載せてほしいことが記されている。講演直後の九月一八日付礼状では「塾監局占拠という異常な事態のなかでの小泉講座」だったが「先生のご講義を伺いたいという学生で定員四八〇名の教室が溢れるという盛況」で、「久し振りに三田山上に学問的雰囲気を感じた感じがいたしました」とのべられる。なお、小泉信三記念講座については『慶応義塾史事典』(慶応義塾史事典編集委員会編、慶応義塾発行、二〇〇八年)の「小泉信三記念慶応義塾学事振興基金」の項を参照。

この講演の速記稿はすでに『丸山眞男手帖』第五七号(二〇一一年四月)に復刻されている。「慶応義塾小泉信三記念基金運営委員会および(丸山の)著作権継承者の丸山ゆかり氏の了承を得」た上での復刻であることが示され、さらにこの講演の記録の刊行について講演を実現させた、福沢諭吉協会常務理事の土橋俊一の準備とそれを承けた

理事長の富田正文の強い希望にこたえた竹田行之氏が、丸山眞男手帖の会の協力をえて刊行にいたるまでの経緯の説明がある。

『丸山眞男手帖』掲載の翻刻は、本文だけについても原文にはない見出しをつけ、「」によって原文を補ったほか、全体にわたって詳細に原文の措辞に手を加えている。その結果、速記稿は、読み易くまた文章としての質が高まっている。しかしその反面、本郷の東大キャンパスの紛争の渦中から塾監局も占拠された慶応義塾に駆けつけた丸山の生理的・心理的な緊張・昂奮と乱れた息づかいを伝えるような原文のリアリテイが何ほどか失われていることも否定出来ない。いずれにしてもこの速記稿は丸山自身の校閲を経ていないので、今後のこの速記稿の扱いについては、丸山文庫所蔵の、丸山原稿、速記稿全体の扱いにあわせて検討する必要がある。

### C. 草稿断片の意味

大量の草稿類が丸山の学問と思想の理解にどのような意味をもつだろうか。乱暴な二分法をあえてすれば、一方には刊行された文章が草稿にこめられた意味を表現しつくして、草稿は一種の抜殻のような意味しか持たない場合と、他方では公刊後もなお、草稿がそれにもりこまれなかった意味を伝える場合と両方が考えられる。ここでは、丸山の福沢論草稿にうかがわれる後の場合についてとりあえず三つのケースを紹介する。

1. 将来の研究の構想。福沢に関する草稿類の中で量が最も多い資料番号三四三は、福沢研究の主題別に、主題を記した紙を表紙のよう

にして、この主題に関連する、執筆時期を異にする草稿断片を、もとのつながりを解体してまとめている。このような一種の編集は、丸山の後年の作業と推定され、丸山が、岩波書店の編集者伊藤修の協力をえて、ライフワークとしての福沢研究の準備作業として行ったのではないかと思われる。晩年の丸山が松沢に「これから先やりたいのは福沢と徂徠だ」と語ったことが想起される。それとともにこのような再編成がBの1についてのべた、一九四八年の交詢社福沢文庫開設記念会講演について、その「結び」と考えられる草稿がほぼ特定出来たのに、その他の部分が特定出来ないという問題ももたらしている。

2. 草稿をもとにして公刊された文とは別バージョンの草稿。資料番号三四三—三一—は、かなり長く完成度も高い草稿であるが、現在までの所これをもとにした公刊の文は発見されていない。『福沢論吉選集第四卷』解題の別バージョンか、あるいはそれとも異なる論文の草稿ではないかと推定される。

3. 公刊された文には十分現われていない、あるいは公刊されなかった草稿で、時に公刊された文より深い、あるいは鋭い分析を示すもの。例えば、一九七一年みずせセミナー講義「福沢論吉の人と思想」の一節、『丸山眞男集』第二五卷三一—一六頁、これは丸山の講義草稿ではなく植手通有のメモによる部分だが、これに対応する丸山の草稿（資料番号三四三—一一二）は次のようである。

「明、25、12、16、18「富豪の要用」

故に文明世界、今日の事態を評すれば、到底行く可からざ

る道を行きながら、一步を退く可からず、後世子孫の事は唯だ天命に在りとして、真一文字に進行するものと云ふ可し」

〔傍点原文〕

宿命としての「近代化」。都合のいゝところばかりもらうというような虫のいい事はできない。結果が必ずしもめでたしく〜でないことを承知しながら、その途をひきうけ、あえてその方向に賭ける以外には、オルターナティブはない。「到底行く可らざる道を行きながら一步を退くべからず」という表現には、ほとんど二ヒリズムと紙一重のひききがある。(それほど一筋なわで規定できる思想家ではないことはこの一事でも察しられよう) このコンパスは一筋なわでない。」

この断片の前葉には横書で次のように記される。

「演技と心情告白と、

以上の二つの矛盾した側面の接点としての「自伝」

ふつうはまさに自己の心境を率直に語ったものと解される。もちろんである。自分の弱さや臆病さをあけすけに語っている。率直さ、茶目っ気、無邪気さなど。しかし、ここでも楯の半面を見なければならぬのではないか。どこまでが自己表現で、どこまでが演技か、一通りでなくせもの。

日本の近代化についての深い絶望と楽観。

絶望を裏にひめた楽観的言動。

←

人間観と幕末維新の原体験に根ざす。」

この部分は、「講義」では『丸山眞男集』第一五卷三〇八—〇九頁に対応しているが、「講義」で語られたところよりは鋭く深い。それはまた晩年の丸山の福沢理解が、重要な点で戦中・戦後初期のそれから転回したことを示すようである。

附記 丸山眞男の福沢研究が慶応義塾の長老教授や福沢先生研究会に集まった研究者、学生によって見出され高い評価を受ける経緯を始め多くのことについて、竹田行之氏の教示をえた。慶応義塾福沢研究センターの西澤直子教授は、福沢先生研究会の刊行物を捜し出して、コピーを提供して下さり、また西川俊作教授の没後、同センターに残された前掲『去来有信』を丸山文庫に寄贈して頂いた。さらに、一九五〇年の大阪慶応倶楽部主催の講演については西澤教授と同センターの都倉武之准教授が、慶応義塾大学と大阪慶応倶楽部の両方にわたって講演速記稿が残されていないか、調査して、存在しないことを確かめて下さった。お三方の好意に心からお礼申上げる。また慶応義塾大学とその記念行事の一環としてこの講演を実現された大阪慶応倶楽部に、この速記稿の復刻にあたって感謝の意を表す。

なお、丸山眞男文庫の山辺春彦・川口雄一両氏は、汚い原稿の整理入力段階から度々追加記入したゲラの整理・もどしにいたるまで終始大きな力添を下された。記して感謝する。(松沢弘陽)